# 目指せトップアイドル　394プロダクション物語

六任李零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
目指せトップアイドル　３９４プロダクション物語

【Ｎコード】
Ｎ７９２１Ｙ

【作者名】
六任李零

【あらすじ】
３９４プロダクション。かつては大手アイドル事務所として有名だった。
だがしかし、とある事件により事務所内で問題が起きそれが原因で廃れていってしまった。
そして１代目・２代目により廃れてしまった３９４プロダクションを再建しようと３代目の息子が立ち上がる！
これは３９４プロダクションが昔の栄光を取り戻し、世界に名の知れるアイドル事務所になるまでの物語である。

【リレー小説です。交代にお話を書いていきます。なのでキャラが少し変化しても特に気にせずに……】

シリーズ構成：作者

順：作者⇒浅門汰斗⇒アザトク⇒ｓｉｂｕｇａｋｉ⇒霊剣荒鷹⇒松上

## プロローグ　それは始まりの2年前（前書き）

プロローグと言うわけで第一話より二年前のお話です。
アイドル達の年齢に変更はないので中学生・春香の登場ですね。
と言うわけでプロローグはわたくし作者が書かせてもらいます。
物語の始まりと言うことでヒロイン春香との出会いです。
感想などよろしくお願いします。

## プロローグ　それは始まりの2年前

関西、大阪のとある町にある小さなアイドル事務所『３９４プロダクション』
社員は社長とその妻とその息子……それだけしかいない弱小事務所。

「……父さん。うちってアイドル事務所なんだよ……な？」
「何を言う息子よ、我が３９４プロは私の父親でお前の祖父の時代から続く事務所だぞ」
青年の言葉にその父親はドンとした感じで答える。
「昔は栄えてたけど、父さんが３９４プロのトップアイドルと結婚してからさびれ始めたんだっけ……」
しかしそのトップアイドルが自分の母親だと思うと泣けてくるのである。
「はっははは、お前もいずれそんな出会いがあるかも知れんぞ！」
「そうねやね、あったらええね……母さんみたいな美人がいたら……ははははっ！」
青年の母親は美人である。
さらには１８歳である青年のような子供を持つ年齢には見えない。
「ところで父さん」
「ん？」
「母さんの年齢って」

「聞くな」

彼の母親は自分のことを今だ２０代だと言い張っている。
なんと１６歳のときの隠し子だと言い張るのだ。
そもそもアイドルとして活動していたころの年齢と比較してほしいものである。
どの道３０は超える計算となる。

「まぁ、もうアイドルやめて事務員だしそんなことはいいか……さてと」
「行くのか？」
「なんか知らんねんけど母さんいないだろ？　とにかく学校行くわ」

そう言って青年は背に鞄を背負う。

「卒業式は父さん仕事で行けなくて済まんな」
「母さんが行ける予定だったはずなんだけど……んじゃ」

そう言って青年は家を後にした。

「母さんは寝てるだけなんだがな……起こせばいいのに……」

そんなの後の祭りである。

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

【学校】

ここは青年の今日来るのが最後となるはずの学校。

そしてここは青年の教室。

「今日卒業して俺も本格プロデューサーデビューか……」
（ていうか、近所の家のやよいちゃんしかいない状況ですが……）

「何を気にしているんだ、我が友よ」
「ああ、まなか……。うちのプロダクションのアイドルのことでな」
「そうか、やよいがかわいすぎて事務所がパニックになりそうで危ないんだな。苦労をかけるものだ」
「……」

青年は何も言うことができなかった。

さてさてこのまなかと言う青年は本名は高槻　まなか。
やよいの父親の兄の子供でそのお兄さんが死んだとき
やよいの父親が養子として迎え入れた。

（その時はやよいちゃんだけだったが……）

高槻家は貧乏であった。
そのため2人以上子供ができ始め育てることに苦労してきていた。
しかし……

「しかし！　明日からいよいよやよいもアイドルとして世界に進出するのだな！　俺もマネージャーとしてついて行くぞ！」
「ああ、期待しているよ……天才」

このまなかは喋ることは馬鹿な発言ばかりだが学年一の秀才である。
発明品の特許で高槻家を一躍お金持ちへとランクアップさせ……
るのだが、やよいの父親の優しい精神により金が消えていき

結局のところ一般家庭レベルに収まっている。

「しっかし、まぁ家のプロダクションは人員不足だから助かるわ。主に母さんの昔のグッズとか売って生計立ててたから……」

いまだに母親の根強いファンは多い。

「はっはは、明日からはその心配もなくなり、トップアイドル育成事務所になるんだな！」

「アー、ソウデスネー」

トップアイドル事務所なんてものはそんなちょっとよそっとじゃなれるものではない。

天下の765プロですらいろいろあって今あの地位にあるのだ。

そんな簡単になれるものならなら青年の事務所はすでにトップアイドル事務所だ。

「しかし……今日は母さんはちゃんと来るのか心配だなぁ……」

「あなたの所はいつもそんな感じよね」

一人の少女が青年に話しかけてきた。

「ん、ああ、りっちゃんか」

「そのあだ名で呼ぶのいい加減やめてもらえる？」

「なんだよ～、幼馴染じゃんか」

この眼鏡女性はは『秋月　律子』青年が小学校で知り合って以来の知り合い。

つまりは幼馴染。今風に言うとファースト幼馴染である。

ちなみにまなかはセカンド幼馴染である。

「毎度のことながら、突然ぶつぶつ言いだして……あなたのお母さんはあなたに似てるような気がするわ」
「え、ぶつぶつ言うとった？　ていうか、俺は同人誌とか何も集めてねぇからな。俺は心が寛大な父さん似なんだからな！」
青年は机から立ち上がり机をドンと叩きながら大声で叫ぶ。
が、周りは見向きもしない。いつもの夫婦漫才だと流す。
なお、別に二人の間に恋愛感情は一切ない。

（実際似ているところといえば極度の妄想癖だけかしらね……）
「りっちゃん。何かひどいこと考えてねぇか？」
「え？　何にも考えてないわよ！」
「……まぁ、いいや。しかし、今日でこの学校とお別れってか。さびしいもんがあるじゃないのさ～」

そう言って再び席に座り机を触りまくる青年。

「そうね。私は関東で就職であなたは実家の会社に就職。つまりは貴方との腐れ縁もおしまいね……」
「りっちゃんとはお別れかぁ～ま、も一つの腐れ縁はこれからも続くだろうがね」
「はっはは！　我が友と俺の腐れ縁という奴は永遠だものな。なぁ！」

そう言うまなかをよそに青年は机をペッタペタト触っていた。

「む、そろそろ移動する時刻だぞ。卒業式が始まる」
「ん、ああ、そうか、行くか」

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

【体育館】

卒業式は終わりを迎えようとしていた。

（結局来なかったですよ？）

一向に青年の母親は来る気配はなかった。

『ドタドタドタドタ』

なかっ……

『ダダッ！』

「まっ、間に合ったわよね！？　ね？　ね！」

入口に突如現れた女性。
それは紛れもなく……

「今かよ……」

青年の”母親であった”
無論人の目を集めるのは間違いなかった……

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

【22分後】

「と言うわけでお母さんはこれから用事があるんで先に帰るけど」
「来てそうそうね……」
「あ、これ買っといてね？」
そう言って渡されたのは今日の夕食用の材料メモである。
「青ネギ、サーロインステーキ……ごちそうやないですかい」
「そう、ごちそう」
「……でもこれ焼いたら出来る簡単な……」
「じゃ、よろしく」
「ちょ！？」
そして青年の母親こと元アイドル『作者　小鳥』はその場を走って去って行ってしまった。
「……また同人誌漁りじゃないだろうな……」
青年は去っていく母親を見つめていた……
「まったく。貴方はいつも大変ね」
「おっしゃる通りで……ま、なんにせよここでいったんお別れだ」
「そうね、これで貴方達ともお別れね。また、あえるといいわね……」
「ま、言ったんの別れだ……」
そう言って覚は手を差し出す。
その上にまなかが手を重ねる。
そして律子も手を重ねる。
「ふふ、また再び会う日まで。さらばだ、我が友、律子よ」

「ふふっ。じゃあね」

そう言って律子は帰って行った……
その後まなかとも買い物に行くために分かれ
青年は何でも安いのは〇〇〇〇～に買い物に向かった。

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

現在買い物帰りで帰宅中。

「早く帰んねぇと痛むな……」

そう言って急いで帰ろうとしていた時。

「ふふ？　ん、ここが今日から住む町か？いい町だなぁ」

一人の少女が陽気に歩いていた。

「ふんふ？　って、おわわわわっ！」

突然何もない場所でこけようとしていた。

「おおっと、危ねぇっ！」

『ポサァ！』

少女を助けるために青年は少女の体を抱きかかえることになる。

「おっと。して、大丈夫か？」
「あっ、はっ、はい、大丈夫です」

助けるときに落ちた買い物を拾いながら少女に話しかける。
「……」
「あの？　どうしたんですか？」
（この子は、なにやら俺が求めていたような女の子じゃないか？
もしや俺が今まで探して見つからなかった『普通の女の子』なのでは……）

青年は逸材を見つけた。

「ところで君……アイドルに興味ないか？」
「ええっ、アイドルですか！？　それは……。まぁ、なりたいって思ったことはありますけど」
「じゃあ、なっちゃわないか！」
「えっ、ええ！？　なれるんですか！アイドルに！」

驚く少女に青年は名刺を見せる。

「そう、俺は394プロダクションのプロデューサーさ」
「プッ、プロデューサーさんですか！」
「そう、てなわけでアイドルをやってみないか？えーと……」

少女の名前を知らない。
すると……

「私の名前は『天海　春香』っていいます！　よろしくお願いしますプロデューサーさん！」

「……ああ、よろしく春香」

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

「なんか電話で軽くアイドルになるのを了承してくれちゃったな」
「お母さんはそう言うの決断早いですから」
連れていく際に親に許可を取るために電話したのだが
あっさりと「かまいませんよ」と言われてしまい青年……
プロデューサーはあっけにとられてしまった。

「とりあえずさて、ここが事務所だ」
「ここが……ですか？」
「ボロかろうが何かろうがここが事務所だ」
そう言ってプロデューサーは事務所の扉をあける。
「……っと、父さんはいないのか……っとのあとに父さん……ププっ」
プロデューサーの笑いのツボは常人とは違う。

「あの～」
「っと。すまんな、どうも事務所の主は留守のようだわ」
そう言ってプロデューサーは買い物を近くにあった冷蔵庫に入れる。
「しかし運のいい。今日はパーティーなんだ」
「パーティ……ですか？」
「そうだな……卒業式と入学式かな」

そう言ってプロデューサーは携帯電話を手に取る。
そしてメールを打ち始める。

『ピピカ』

「今日は事務所を挙げた大パーティーになるぞ！　春香ちゃん！」
「え？　えぇ！？」

『てれてんてんてんてててんてーてんてて！』

「おっと……ふふ。了承か」
「なんですか今の着信音」
「想像しろ……いや、してください」
「は、はい！」

プロデューサーのネタは通用しなかった。

「まぁいい……追加の材料を買いに行こう！」
「え？　材料の買い物ですか？」
「そう。パーティーの料理の材料をね♪」

そう言って事務所の出入り口に向かうプロデューサー。

「わ、私も行きます！」
「そりゃ一人にするわけにはいかないからなぁ」
「あ、私お菓子作るのが得意です！」
「お、さすがは女子中学生」

そう言って春香に向かってサムズアップをする。

「と言ってもお菓子作る時間なんてないけどな！」
「あ、そうですよね？」
「ふむ……っと、さて出かけるか」
「あ、はいっ！」

そうして二人は事務所を後にした……

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

【数時間後】

「我が友よ、これはこちらでいいのかな？」
「ＯＫＯＫ。それはこっちでそれはあっち」

まなかなども集まりいろいろなパーティーのまとめが始まろうとしていた。
プロデューサー就任式、学校卒業記念、やよい・春香アイドルデビュー等
ちなみに律子は今日支度して明日に関東の親戚の家に行く予定らしく呼んではいない。

「うっうー！　もやし祭りです～」
「いや、そんな祭りないから」

うっうーと叫んでいるのはやよいちゃんである。
貧乏時代の感覚がいまだ抜けていないようだ。

「ただいま～……あら、何この状況」
「母さん……何その袋……ってまた薄い本かよっ！」

小鳥の持っている袋を取り上げプロデューサーは机に置く。
「それより確かにパーティーはする予定だったけどここまでは想像してなかったわ」
「いろいろ重なったんだよ、パーリィーが」
「パーリィねぇ……」
そうこう言っている間にパーティーの準備は終わりへと向かって行く。
「と言うわけでそろそろパーティーだ」
「あれ、パーリィーじゃないんですか？」
「ふ、ケースバイケース。気分の問題さ」
そう言って話しかけてきた春香の頭をなでる。
「はわっ！」
「おっと……いつものこうたろうへの癖が出ちゃったか」
「こうたろう？」
『ダトダトダト』
「兄貴～卒業おめでとう～！」
『ドカスィ！』
「おうふ！」
突然突撃してきた少年によりプロデューサーはその場に倒れる。

「いつつ……これがこうたろう。俺の弟」
「あ、オレっちはこうたろう１０歳。よろしくです」

ペコリと頭を下げるこうたろう。

「そういやあの双子の子は？」
「亜美真美の事は言わないで兄貴……逃げるのにも一苦労で……」

こうたろうはプロデューサから降り体を小刻みに震わせている。

「幼馴染は大切にな……さて、パーティーの始まりだ！」

そして盛大なパーティーは始まった！

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

【数時間後】

盛大なパーティーは終わりそこには酷い惨状しか残っていなかった。
まなかは寝てしまったやよいちゃんを連れ家に帰り。
プロデューサーの父・正宗と母・小鳥は寝てしまったこうたろうをつれ事務所の上にある住居スペースへ。
残ったのは春香とプロデューサーだけである。

「ひどい惨状だな……」
「そ、そうですね」
「ッとなんだ時間も遅いし送っていくよ」

手のひらの上にグーでポンっとして何かを思いついたのようにプロデューサーは言う。

「え、いえいえそんな」
「まったく、昨日引越してきたばかりだとも言ってただろ」
「ええ、昨日はずっと引越した家にいて今日は街の探索にと……」
「つまりはここらのことをあまりよく知らないの。だから危なすぎるしそれに女子中学生なんだよ春香は」
「は、はい……」

プロデューサーの言葉に春香は圧倒される。

「ま、住所は聞いてあるし大丈夫さ。さて行こうか」
「は、はい」

そう言ってプロデューサーは服を整えて出口へ向かった。

『ガチャン』

事務所の入り口にカギを閉めて春香とプロデューサーは歩き出す。

「はてさて、大変な始まりになったわけだが……明日はいろいろ説明とかで漁ってからが本番だ」
「そう、なんですよね……さっきの盛り上がりもですけどいまだに実感がわいてきませんね」

歩きながら二人は喋り続ける。

「でもな、これからはそれが日常になるんやからな」
「日常に……なる……」

「そ、アイドルってのは……騒がしいものやっちゅうことさ」
そう言ってプロデューサーはその場に止まる。
そして手を上に挙げ万歳をする状態になる。
「この広い世界の人が春香ちゃんの存在を知ることになるんだ。そう……トップアイドルに！」
「……」
春香はプロデューサーの発言に呆気にとられてしまった。
「ん？　なんだ春香ちゃん。どうやら今頃アイドルと言うものを理解したようやね」
「……なります」
「お？」
「私！　トップアイドル目指します！」
春香もプロデューサーと同じく万歳をする。
「世界中の人に私を知ってもらいます！」
「せやね」
「あれ！？　ノリが軽いですよ！？」
プロデューサーの軽い返事に春香は驚く。
「当たり前だからさ」
「え？」
「俺と君が組むんだよ春香ちゃん。知られわたるさ、絶対」
プロデューサーはドヤ顔で春香に言う。

「ふふっ。臭いですよプロデューサーさん」
「ふふっ。臭いか。それもまたよしとしよ」

そう言ってプロデューサーは春香の手をとる。

「頑張ろうとしようか。春香ちゃん」
「……はいっ！」

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

【2年後】

「えー今回はオオカンテレビのローカル番組『せやなぁ』の商店街探索コーナーのMCのオーディションです。ではこれから始めさせていただきたいと思います」

某所にてオーディションが行われていた。

「……はい、４番の方ありがとうございました。次、５番の方」
「はいっ！」

そして５番の人物は立ち上がる。

「５番！　３９４プロダクション　天海春香です。お願いします！」

そう、それは高校生になって実績も獲得した天海春香だった。

「ふっ。初のレギュラー獲得間違いなしだぜ、春香」

そしてそれを離れた所から見守るのはプロデューサー。

「はい。どうもありがとうございました」

そうしてオーディションは終わる。

「プロデューサーさん！」

「ふ、春香、イッツパーフェクト♪」

そう言って二人はハイタッチをする。

「結果はどうなるでしょうかね」

「ま、いい結果になると信じようや」

そう言って二人は事務所に帰って行った。

これからのために。

次回に続く！

## プロローグ　それは始まりの2年前（後書き）

関西スタートですがいずれは全国進出しますよ？
春香は関東からこっちに引っ越してきたわけですね。
次回から第一話スタートです。
一話からはさらなるアイドル候補たちが登場する予定です。
と言うわけで次回の話は浅門汰斗さんが書いてくれる予定です。
はてさて第一話……どんな話になるか私自身も楽しみです。
ではまた次の私の回に～♪

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7921y/

---

目指せトップアイドル　394プロダクション物語

2011年11月23日17時51分発行